



写真-15 屋外市場（バザール）

両者は対照的であるが、はっきりと客層が分離しているわけではなく、スタラ・パピエルニアへの来客も双方を行き来して買い物などを楽しんでいる様子であった。冷戦終了後、東欧では所得格差が広がっていると見られるが、ここでは両者が隣接して幅広い客層を吸収する複合的な商業集積となっている。ただ、野外市場が盛況であるのに比べて、スタラ・パピエルニアでは2015年調査時点ですでにいくつかのテナントが撤退しており、高級路線がいつまで維持できるかどうか、不安要素もありそうである。

また、下工場の施設の一部を運営するフィンランドのメツァ・ティシュー社は、設備の老朽化を理由に工場閉鎖を予定しており、200人程度の雇用が失われると見られている。同時に70haに及ぶ製紙工場コンプレックス全体の下水処理場（同社が所有していた）も閉鎖となり、地域の環境問題として大きな課題となっている。⁸⁾

このように、老朽化した近代産業遺産は、地域の社会的自然的環境の双方にとって厄介者となっていた中で、これを商業、サービス業や博物館といった社会教育施設として再生し、何とか地域の経済的活力（雇用の創出など）と文化の活性化に結びつけようとする政策が進行中であるが、実際はなかなか思い通りにはいかない不安要素も残るといった状況である。

3. スタリィ・ブロヴァル（Stary Browar）：ボズナン都心

同施設はボズナン（あるいはボズナニ）⁹⁾の都心に位置し、大規模な工場敷地（ビール醸造は装置産業の典型であり、近代以降はどんどん規模が拡大した）を再開発した事例である。

名称は、「旧醸造所（英語：Old Brewery）」で、スタラ・パピエルニア同様、固有名詞を言うまでもなく当該地域では知らぬ者のない象徴的な工場であったことがわかる。副タイトルとして「商業・芸術・ビジネスの拠点（Centrum Handlu, Sztuki i Biznesu）」（英語：Center of Trade, Art and Business）をうたっている。旧工場敷地を活用した商業施設とビジネス機能が合体した複合開発は珍しくないが、「アート＝芸術文化」の要素が取り入れられていることが重要なポイントであり、当該施設の特徴である。

敷地内には商業・サービス業、ビジネス機能に加え、アート・ギャラリーが同居しており、それ以外にもホテルなど随所にアート作品が意匠として活用されている。

なお、ポーランド西部に位置するボズナン（人口約56万人）は、ポーランド最古の都市の一つで、中世ポーランド王国の最初の首都、現在はヴィエルコポルスカ県（Województwo wielkopolskie）の県都である。都市名の語源は「知る（znać）」で、「誰でも知っている有名な街」といった意味がある。古くから商業都市として栄え、今日では文化、学術、商工業の中心地としても知られるポーランドでも重要な都市である。

以下、同施設のウェブサイト（<http://www.starybrowar5050.com/>）の記述などを参考に概要を紹介する。

（1）沿革

旧ハガー醸造所は、1844年ドイツのヴュルテンベルク（Württemberg）からボズナンにやってきた醸造家アンブロシウス・フッガー（Ambrosius Hugger：ポーランドでは「ハガー」）によって開設された。

19世紀の初頭、ハガーは最初の醸造所をヴロニツカ（Wroniecka）通りに建てた。その後ビールへの関心は高くなり、ハガー一族は1849年に聖ヴォイチェフ（św. Wojciecha）¹⁰⁾通りに新たな醸造所をオープンした。

当時はビール製造の技術革新の時期であった。チェコのピルゼン（ブルゼニ）で、醸造時の温度を常温（20℃）からおよそ10℃くらいに引き下げることで、黄金色でクリア、強い泡立ちのピルスナー（ピルス）タイプの醸造法が確立された。これと平行して製造工程の自動化や蒸気機関、電気動力の機械などが次々と導入され、ビール製造の工業化が進み、小規模の醸造所は次々と淘汰されて、経営規模はどんどん拡大し典型的な装置産業となっていった。

アンブロシウスの2人の息子、ユリウス（Julius）とアルフォンス（Alfons）は、父の意向に反してより大規模な設備投資を行い、ハガーを大ビールメーカーに育てた。

1876年、ポウヴィエイスカ（Półwiejska）通りと、ヴィルデツキー門（Bramy Wildecki）からグロールマン城砦（Fortu Grolman）近くの要塞に続く通りとが交差する角に、ハガー兄弟と保険会社は冷凍庫を、次いで2棟の建物と別棟を買った。これらがのちのハガー醸造所の発祥である。

1890年ごろ、ハガー兄弟醸造所（Browar Braci Huggerów）は拡張され、発酵棟、麦芽製造棟、特徴的な煙突の（麦芽）乾燥棟が建てられる。建物のデザインは、当時ドイツ語圏を中心に流行したルントボーゲンシュティール（Rundbogenstil）様式¹¹⁾で、赤レンガによる連続アーチやアーケード、半円形の窓や同じく赤レンガによるシンプルな装飾が特徴である。

1895-1921年ごろ、ハガー兄弟醸造所は合資会社に改組され、同社の繁栄の時期を迎える。1905年には中庭を囲んでオフィス棟や樽製造所棟、新しい煙突が建てられた。1918年には、クリスタウ（Kryształ）¹²⁾、スペチアウ（Specjał）¹³⁾、ポーター（Porter）¹⁴⁾の3種類で72,000ヘクトリットル（720万リットル）を生産した。

1926年ごろ、化学会社「ロマーナ・マヤ（Romana Maya）社」に買収され、1937年には82社の持ち株会社、「連邦レストラン醸造協会（Browar Związkowy